
王の酒と自転車 2号

みゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王の酒と自転車2号

【Nコード】

N4739Z

【作者名】

みゆう

【あらすじ】

第5次聖杯戦争。遠坂凜は万を期して英雄王の召喚に臨むが致命的な『うっかり』を連発してしまう。また、聖杯戦争を目撃し、サーヴァントに二度襲撃された衛宮士郎は土蔵に逃げ込む。そこにあったのは魔法陣と一台のママチャリ。そして彼を救ったのは長身の美女だった。

第1話 お酒だけですって!!? (前書き)

本篇再構成もの。英霊入れ替わりなどの状況改変です。

第1話 お酒だけですって!?!?

とある屋敷の地下室にて、1人の少女は真夜中に動き出す。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。祖には我が大師シュバイ
ンオーグ。降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出
で、王国に至る三叉路は循環せよ」

体を、心を歯車に変えて、一つの神秘を成すパーツへと変質させる。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。繰り返すつどに五度。
ただ、満たされる刻を破却する」

魔法陣に用いた宝石の質は最高ランクのものを惜しむことなくつき
込んだ。じきに午前二時、魔力のピークも今で間違いない。触媒に
は、かの英雄王に縁のあると伝えられている“この世で最初に脱皮
した蛇の抜け殻の化石”を用いた。父が前回の聖杯戦争で用いるは
ずだった聖遺物。

ここまでやって失敗するわけにはいかないわ。

「
Anfang」

魔力回路に魔力が走り、地下室には魔法陣を中心として濃密なエー

テルが渦巻いていく。

腕が 体中が、熱い。

「 告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

さあ来なさい。最強のサーヴァント。私に勝利をもたらす者よ。

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ ！」

エーテルと紅い光の奔流が、地下室を弾き飛ばすかの如く吹き荒れる。あまりの眩しさに瞳を閉じた。そして期待して彼の訪れを待つ。

確信した。上手く行った。完璧だわ。

場の魔力が収まるのを感じとり、瞳を開く。しかし目の前には肝心のサーヴァントはおらず、目の前には先ほどの魔力嵐で少し散らかった地下室だけ。

どういうことよ。失敗したの？

すると、上の方から何か音がした。具体的に想像するならば、何か屋根に落ちて来て貫いたような、本当なら考えたくもないような音が地下室からでも確かに聞こえた。

もしかして、またやっちゃった？

嫌な予感がして上の階、居間上がる。何故か鬱陶しいことに、扉が壊れて開かなかったのでヤケクソ気味に蹴り飛ばした。

「ドア壊れてる！？ ああもう、邪魔だこのお！！」

すると目の前に広がるの凄惨たる光景。間違いなく屋根から何かが落ちて来て居間を滅茶苦茶にしている。そしてその原因であろう金髪少年が紅いソファに腰掛けている。

どうしてこんなことになったのか、そう考え込むまでもなく柱時計の針を見ると理解した。この時計の針は一時間早い。つまり、魔力のピークに達していなかったためにこんなことになっているのだ。

しかし、この居間には屋根から降って来たと思われる少年がいる。

召喚自体は失敗ではないはずだ。声を掛けようとすると、先に少年の方が話しかけて来た。

「あの、すみませんが。お姉さんが、マスターであってますでしょうか？」

自分より年下の小中学生にしか見えない金髪少年は、腰低い態度で少女に訪ねてきた。

「そうよ。私があなたのマスターの遠坂凜よ」

彼の姿を観察する。小柄な少年は一見只の外人の子供に見える。しかしあり得ない紅色の瞳に、人のみではありえないほどの魔力量。これが英霊でなくて何だというのか。

「そうですか。いきなり上空に召喚された上にマスターらしき人の

姿が見当たらなかつたので、しばし呆然としていましたが。お姉さんがマスターでしたか。よかった」

少年は笑顔を向ける。

やばい。この子凄く可愛い。そつちの気があつたら一瞬で落ちてしまいそう。カリスマ持ちねこの子。

「それじゃ、色々あつたけど気を取り直してさっさと契約しちゃいましょ」

「ええ。それがいいですね。まだ完全にパスが通りきっていないようですので」

「サーヴァント、アーチャーの名に懸け誓いを受けます。遠坂凜、この聖杯戦争において貴方を我が主として認めましよう」

拳の令呪が熱くなる。確かにここに契約が交わされたのだ。

ふくんアーチャーか。セイバーじゃなくて残念。でもこの子ってセイバーって雰囲気じゃないわよね。あつ。

クラス名は先ほどの誓いで少年の方から名乗って来た。しかし、まだ肝心なことを聞いていないことに気づく。

「あつ、忘れてた。それで一つ訊ねるけど、あなた本当にあのギルガメッシュで間違いないわね？」

「ええ、間違いなく僕がギルガメッシュ本人です。お姉さん、こんな姿では信じられないかもしれません」

「あの英雄王がこんな子供だったとはね。まあいいわ。ところで、パスはきちんと繋がっているみたいだけど、貴方の現在の調子を教えてもらえるかしら？」

「ええ、お姉さん。魔力は充分過ぎるほど供給されています。そのおかげか敏捷値と魔力値が上昇してます。他のステータスはあまり変わりません。ただ幸運値が大幅に低下しているのが気になりますね」

「うわあ。私も今確認しているところだけど、あなたかなり凄いやない。筋力B、魔力A+、耐久B、敏捷A、宝具A++ですつて！？ 幸運値がEつてのを除けば、アーチャーとしては破格よ。ひよっとしたらセイバー以上かもしれないわ。本当あなたを召喚して良かった」

見た目が子供のため、能力が低いのではないかと懸念していたがそんなことはない。予想以上の現状に思わず笑みが零れてしまう。アーチャーも顔を若干赤くしながら笑みを返してきた。

「ありがとうございます。そう褒めてもらえるのはうれしんですけど、実はこの姿って最盛期のすがたじゃないんですよね。実際の戦いになったらリーチの問題が出て来ると思っています」

「何でリーチが関係するの？ あなたアーチャーでしょ。遠くから狙撃すれば問題ないじゃない。もしかして弓を引くのに背が足りないなんて言わないでよね」

「そこなんです、さっきの召喚のせいなのか、宝具は2つの内の1つがなくなっていて……」

「えっ？」

一瞬、頭の中が真っ白になった。何かが崩れ落ちるような音、仏壇で鳴らす“あの音”の幻聴が聞こえた気がする。

「もう一度言って頂戴。アーチャー？」

「お姉さん、いえ、マスター。報告すると僕が所有しているはずの宝具が一つ足りません」

場の空気が凍りついた。これは“うつかり”では済ませられない事態かもしれない。アーチャーも年相応の子供のような、すぎる瞳を向けて来る。

「原因はさておき、それって拙いわね。ちなみにどういうものだったの？」

「ラ、ランクEXの剣です」

「な、EX!？」

「はい、お姉さんの魔力なら存分に扱えるはずだったんですけどないものは仕方ありません。もう一つの宝具でなんとかするしかないんですけど、けど……」

「けど？ そっち宝具はどんなものなの？」

ゲート・オブ・バビロン

「ランクはE A++の王の財宝というものなんですけど、これは本来別空間にいるんなものを入れておいて自由に出し入れができるというもので、そのなかには僕が生前集めていた宝具の原点となる武器や世界中の財宝なんかが入っています」

「世界中の財宝!？もしかして宝石もいっぱい入ってるの？」

「ええ。いっぱい入っていました」

「いました？」

「中身が、中身が何故か“ない”んですよ」

「なんですって？ もう一回言って頂戴アーチャー。ああ、もう。この言葉二度目ね」

先ほどの言葉が聞き間違いでなければとんでもない事態だ。きっと自分は今、死人のように蒼白な顔をしていることだろう。そして目の前のアーチャーも生気が表情に宿っていなかった。

「武器も財宝も全く手元に“ない”んです。さっき空から落ちてきたとき、飛べるものを用意しようと思っただけ何もなくて。何故か“

お酒だけ”はあるんですけどね
「酒、お酒だけですって！！？」

あまりの衝撃に膝から崩れおちた。涙すら出て来ない。むしろ笑いたいほどの衝動が腹の底から湧き起こって来る。

もうダメだ。勝てる気がしない。

ごめんなさい。天国のお父様。そしてどうして遠坂家の呪いを解いてくれなかったのですか。

「僕の手元には肝心の武器がない。これは非常に拙い状態です。お姉さん、これから僕たちはどうしたらいいでしょうか……」

「な、なんで、こうなるのよ！」

両手を床について嘆く。あまりにもみっともない姿だが、己の迂闊さに心から嫌気がさすのだ。

「僕に言わないで下さいよ。途方に暮れているのは僕も一緒なんですから。もう少しこれからの前向きな対処方を考えましょう。まだ全てのサーヴァントは召喚されていないのでしょうか？」

「ええ。まだセイバーとライダー、アサシンは召喚されていないらしいわ」

「でしたらそれまでの準備期間に宝具に匹敵する武器を世界中から集めましょう。僕の攻撃は主に剣の射出ですから。とにかくたくさん必要です。ステータスは他に劣らない自信がありますし、剣も問題なく扱えますが、こちらと違って敵は宝具を使えます。宝具でなくてもいいのでそれに劣らないぐらいの武器を確保できないでしょうか？」

「冗談言わないですよ！　ただでさえ家の魔術はお金がかかっている

の！ あなたを呼び出すための魔法陣に使った宝石だつてかなり痛い出費だったのよ！ それでこの現代に宝具に匹敵する武器を調達するですって！？ 冗談じゃないわ。もう今夜はヤケよ！ その酒つてのを寄こしなさい。今日は呑むわよアーチャー！」

「お姉さんつて、未成年じゃ？ 日本つて20歳未満はお酒はダメなんですよ」

「グダグダ言わない。さつさと出しなさい。世界の財宝を集めつくれたアンタがもってるからにはよっぽど良いお酒なんですよ。出さない。そして酌しなさい。これはマスター命令よー！」

「……はい」

酒がないとやってられないわ。今日の出来事なんか忘れてやるんだから。

やれやれといった様子でアーチャーは背後に現れた空間の割れ目からその酒を取り出した。そして注がれた酒を一気に飲み干す。

「あら。これすごい美味しいじゃない。こんなの一度飲んだら他のお酒なんて飲めないわね」

「気に行つて頂けて何よりです」

「本当においしいわ」

本当に言葉で表せないくらいにおいしい。これのためなら宝石の1個や2個惜しくないわね。ん、アレ？ アーチャーのものは私のもの、私のものは私のもの。うん。間違つてない。なら、これはもしかしたらイケるかもしれない。

「なんだか凄く嬉しそうですね。元気になつてくれて良かったです」

無邪気で、そして不幸なアーチャーはあかいあくまの企みを何も知らない。

第1話 お酒だけですって!!? (後書き)

他にメインの作品があるため、正直不定期更新だと思えます。が、アイディアは大体出来上がっています。感想など頂けると幸いです。次回はシロウの物語です。

第0話 それではお使いに行ってきます(前書き)

本当は士郎サイドの話の予定でしたが、今回はプロローグ的なものになります。かなり短いです。HFのTrueエンドに近い形の未来での話。

第0話 それではお使いに行ってきます

「ライダー、もし“先輩”と、この先出会うことがあるのなら
どうか“先輩”の力になって下さい」

そう最期に言い残して、彼女は去っていった。何の未練もない、
安らかな笑みだった。それを見てつられたのか、この世界で最も愛
する人を失ったのにも関わらず、自然と自分も笑っていた。そして
何故だか涙は流れなかった。

柔らかな風が吹き、庭先の桜の花びらが舞う。まるで空からの祝
福のように。きっと彼が迎えに来てくれたのだろう。これからの桜
は自分の代わりに彼がいるから大丈夫だ。

「桜をよろしくお願いします。 土郎」

そしてもう一度、彼女の最期の言葉を心の中で反芻した。

『 “先輩”と、この先出会うことがあるのなら どうか “先
輩”の力になって下さい』

“土郎さん”ではなく、“先輩”。それはかつての日々の呼び方。
その言葉が意味するところは誰よりも自分がよくわかっている。

遺言は確かに受け取りましたよ。

少しずつ薄れていく手を握り締め、空に行った彼女に誓った。

「いい笑顔してるじゃない。桜はきっとアイツのところに行けたのね」

唐突に現れたのは、愛する主の姉である人物。彼女の頭をひと撫でて、取り出したハンカチーフを顔に掛ける。

「今までの子こと、ありがとうねライダー」

少しだけ目頭に涙を浮かべながら、感謝の言葉を口にする彼女。

「私は桜の“使い魔”であり、家族ですから当然のことです」

第二魔法の後継者として大成した彼女は最盛期の容姿のまま。そして当然、人ではない自分の姿も変わらない。土蔵も、屋敷も「あ

の頃と変わらないように」と、彼女が、彼女の教え子たちが管理し続けた。ただ、目の前にソメイヨシノが咲き誇っている姿だけが月日の流れを感じさせる。

彼女と出会ってからの日々が走馬灯のように駆け巡る。

結婚の記念にと、彼がこの木を植えてから確か60と8年だったでしょうか。そんなに経ってしまったのですね。早いものです。

「それでライダー、あとどれくらい残されているの？」

「あと10分といったところでしょうか」

「そう。もう一度確認するけど、私と『使い魔』の契約を結ぶつもりはないのね？」

「この屋敷を任せる者はいますし、桜の教え子たちも立派に育ってくれました。もうこの世界に思い残すことはありません」

「貴女は還るつもりなの？」

「ええ。違う世界の桜と土郎のところへ」

その言葉に凜は顔をしかめた。それは無理だとも言うのだろうか。

そんなことわかっていますよ。それでも、それでももう一度、いえ何度でも奇跡に掛けたいのです。かつての私たちがそれに掛けて、この手に掴んでみせたように。

「ライダー、座に戻れされた貴女は記憶もなくして只のメデューサになるの。そして並行世界で桜が必ず貴女を呼び出すとは限らないわ。だから提案があるの。私が貴女を」

「並行世界に飛ばす、ですか？ それではダメです」

「どうしてよ！？ 今の記憶を失くしたら……」

「そもそも現界するための魔力が足りません。魂喰いをするなら別

ですが、それを2人は望まない」

「あつ、そうだった」

この歳になつても“うっかり”なんて、大丈夫でしょうか。なんだか心配です。

「それに何より、それでは一つの世界の桜と士郎しか救えないではありませんか。出会えるだけの2人の力になりたいのです」

「そう」

「もし別の世界で貴女と会うことがあつたらそのときはよろしくお願いします」

「私と貴女の仲じゃない。当然よ」

「そろそろ時間のようです。桜に頼まれたお使いに行かないとですね」

腰掛けていた縁側から立ち上がって土蔵に向かう。そして彼が2号と呼んでいた自転車のハンドルに手を掛ける。彼から正式に譲り受け、彼女が変わらぬように魔術で保ち続けてくれた自転車。俗にママチャリと呼ばれるタイプのものだ。自転車としての機能に不満は多々あるが、これなしで生活はできないほど体に馴染んだ相棒である。

自転車を押して門のところへ向かうと、凜が見送りに来ていた。

「気をつけて行ってらっしゃい、ライダー」

「はい。それではお使いに行ってきます。凜、桜、士郎」

どれだけ漕ごうとも僅かにしか進まない相棒に跨り、門に背を向ける。

いつものように「行ってきます」と、今は亡き愛しき人たちの中で告げ、ペダルを力強く踏みしめた。

「ライダーのバカ。本当にお使いに行くみたい……」

薄れゆく意識の中、そんな声が聞こえた気がした。

第0話 それではお使いに行ってきます(後書き)

次こそ召喚。

第2話 俺に力を貸してくれ(前書き)

いよいよ召喚。あるメインキャラの設定がとんでもないことになっています。そしてその影響で士郎も今までのどのルートの士郎とも別人になっています。その点をご了承ください。

第2話 俺に力を貸してくれ

赤い槍を持った長身の騎士と、黄金の鎧を纏った小柄な少年が夜の学園のグラウンドにて死闘を繰り広げていた。

「最初に釣れたのがこんな小僧だとは思わなかったが、中々やるじやねえか。待った甲斐があったってもんだぜ。もっと死合おうぜ」「できれば僕はさっさと終わらせたいんですけどね。最近、仕事が溜まってるんですよ」

興奮した口調で頭部目掛けて鋭い突きを放つ蒼の槍兵に対し、黄金の少年はため息交じりに両刃の片手剣で槍の矛先を弾く。

そこからは目にも止まらぬほどの突きが、少年の喉を、眼を、四肢を、内臓を目掛けて襲いかかる。防戦一方のように見える少年。しかしながら積極的な攻撃こそできていないものの、押されているのは槍兵の方だ。動き自体は僅かに蒼い槍兵のほうが早い。だが少年は力押しで槍を弾きながら前に踏み出し、間合いを取らせないようにする。そのためどうしても槍兵は間合いを保つために後退しながらの戦いになる。

「にしても、その剣の扱いを見てると雑だな、お前。何と言うか雑だ。サーヴァントってのは本来最盛期の姿で現れるってもんだろ？

セイバー、実はお前、本気を出せないんじゃないのか？」

「そういいながら、僕に力負けしてるじゃないですか。そんなんですから、今はまだ、本気になるまでもありません。そういうことだと思って下さい。僕のマスターはケチなんですよ」

その言葉にランサーの形相が変わる。

「舐めやがってセイバー！ 本気を出さなかったことを後悔させてやる！」

予想以上にイケてるじゃないアーチャー。

無銘の片手剣で戦うと言いだしたときは正気かと疑いたかったが、確かにあれだけのステータスがあればランサーにも十分対抗できている。おそらくアチラは手出ししなくても大丈夫だろう。なんとつてアイツには切り札がある。しかも都合のいいことに相手はセイバーだと勘違いしたまま。格好の的になると良いわ。

掴み掛けている初勝利の前に思わず笑みが零れそうになるが、問題は私の方。

アーチャーとランサーが戦っている傍らでマスター同士私たちも戦っていた。相手は男物のスーツを纏った男装の麗人。名はバゼット・フラガ・マクレミッツ。封印指定の執行者。間に合わせの剣でも何とか抑えられているランサーよりも、彼女の方がはるかに厄介な相手だった。おそらく全マスター中、戦闘力だけで言えば最強だろう。しかも彼女は手にナックルを嵌めて、ボクシングよろしくパンチの応酬を繰り返してくるのだ。人間凶器といっても過言ではな

い。

ランサーのマスターが接近戦を仕掛けて来るのに対し、こちらはガンドで牽制しながら距離を取り、適宜宝石魔術を打ち込む。隣の戦闘とは逆の状況だ。

強化の魔術を込めた宝石を使用しているが、それで対峙するのがやっとというのが現状。

「まさか執行者のマスターがいるなんてね。しかもボクシングが一発が重過ぎんのよ」

「セイバーのマスター。その歳で私の動きについて来れるとは貴方も中々やりますね」

私に体術の心得がなければ瞬殺されていただろう。必死でガードするが、その度に腕にしびれが走る。正直このままでは厳しい。相手の体術がボクシングだけかと油断していた矢先、鋭い膝蹴りが鳩尾に刺さる。

口から血が出た。とにかく重い一撃。追い打ちの回し蹴りを横に転がるようにして回避する。

「貴女、本当に人間？ どうかの兵器の間違いじゃないの？」

「どちらでも構いません。セイバーのマスター。コレが最期の通告です。令呪を放棄するなら命までは取りません。10秒だけ時間をあげます」

5mほど先で膝をついている私を見下すように、ナックルを弄りながら彼女は告げる。

宝石を湯水のように使えば勝機はあったが、ここは私に勝ったつもりでいればいい。私たちはまだ、残り6機のサーヴァントとそのマスターを倒さなければいけないのだ。そんな勿体ないことはするわけにはいかない。

相対するマスターの奥に撃ち合っているランサーと、アーチャーの姿が見える。ベストポジションだ。アーチャーの射線上にランサーだけでなく、マスターも並んでいる。加えてランサーとは適当な距離も取れており、少なくともマスターの方は“殺れる”絶好のチャンスだ。

レイラインを通じてアーチャーの戒めを解いた。

マスターごと打ち抜きなさい、アーチャー　！！！！

確かにそう命じた。だが、アーチャーは宝具を使わなかった。それどころか動きを止めている。そしてそれはランサーも敵マスターも同じだった。彼らも一歩も動かない。どこか違うところに対して3人は視線を向けていた。そう、私の背後に。

異なる気配に気付いた私は振り返るとようやく状況を理解した。

校舎の中へ逃げ込む影。人払いはしつかりしてあったはずなのに、も関わらず、まだ学園に人が残っていたのだ。それを追う敵の主従口封じに向かったのだろう。サーヴァントと封印指定の執行者が追っているのだ。間違いなく彼は生きては帰れまい。そして不幸な運

命に導かれようとしている彼の姿に私は見覚えがあった。

「何でよりによって、アイツがここに居るのよ!」

そして彼は“一度”死んだ。

夜、コンビニに買い物に行こうとしたら教室に財布を忘れていることに気づき、仕方ないので取りに帰った。ただそれだけのことだ

ったのに。どうしてこういうことになったのだろう。

グランドで繰り広げられている二組の死闘。

一組は自分が一生かかってもできそうにないほどの高度な魔術を惜しみなく放つツインテールの少女と、それに対して拳で立ち向かう男装の女性。何故魔術師が戦っているのか疑問であったが、もう一組の戦いの方に興味が向いてしまった。

黄金の剣閃と紅い槍の軌跡。とても人間業とは思えないものだった。しかも自分より幼い少年が若干押しているように見える。自分には辿りつけない領域にしばし言葉を失っていた。そして自らの理想である姉の姿と比較する。高度な技術を力技で叩き伏せるその少年の姿。姉もどちらかと言えば腕力で物を言わせるタイプだが、それとは違う。姉の技の方が好みであったが、何故か少年の剣には惹かれるものがあつた。そして悔しかった。

何故、彼には才能があるのにそれを極めようとしなのだろう。才能がないからこそ極めるしかない自分と比較して怒りの感情、殺気さえ覚えてしまった。それがいけなかった。

目線が合ってしまった。

自分の存在が彼らにバレた。おそらく自分は魔術師として認知されていいない。このままだと神秘の秘匿のために殺される。だが、先ほどの光景は魔術師であっても見てはいけけないものの類だと言うことは直感で分かった。

だから逃げた。みっともなかったが逃げた。

絶対に敵わない存在と言うものを、この身はよく知っている。“アレラ”は義姉と同じ“使い魔”だ。人間には絶対に勝てない。

だから逃げた。でも槍兵に追いつかれてしまった。

必死の抵抗を試みたものの廊下で心臓を一突きにされ、自分は確実に死んだはずだった。

死んだはずだった。

しかし、再び目が覚めてしまった。死んだはずの廊下、体には傷一つない状態。しかし、服は傷つき血まみれの状態。傍には魔力が残った赤い宝石のペンダント。思い浮かぶのは、追って来なかった方の少女。彼女の気まぐれなのか、どうやら自分は助けられたらしいことは理解できた。だが、周りに彼女たちの気配はない。救われた命に感謝しつつ、一刻も早く家に帰ろうと決意する。

アル姉、怒るだろうな。

「大丈夫ですか！ シロウ！！」

「うん、アル姉。何でか生きてる」

そして当然のように家路の途中で姉に出会った。先ほどの魔力が気になったのか、帰って来ないのが気になったのか、多分両方だろう。眼を腫らして泣きそうな顔で見つめている。本当に心配させてしまったのだろう。彼女を泣かせることがなかったことに心から安堵する。

良かった。生きていて良かった。

月の輝く夜。月光に照らされるブロンドの髪と白い肌。今日ほど義姉が美しいと思った日はなかった。

「これだけの血、またシロウは無茶をしたのですか！」

血だらけの胸元に手を当てて、彼女は怒りを表しながら言う。

「無茶をした覚えはないんだけど、学校でアル姉と同じような感じの“使い魔”たちが戦ってるのを見た」

「やはりそうでしたか。私が傍に居れば……それでその後どうなったのですか？」

「うん。口封じのために殺されかけたけれど、他の魔術師に助けてもらえたみたい。何か裏がありそうだけど、とりあえず俺が生きてるってのだけは間違いない。だから早いとこ家に帰ろう」

そして家に向かって歩き出す。家に帰れば平穩が待っているはずだった。

着替えを終えて、これから縁側で話し合いをしようとしていた矢先だった。結界の警報が鳴り、家に突然の襲撃者の訪れを伝えた。先ほどの槍兵と、男装の麗人。彼らと庭先にて対する。

「確かに心臓を貫いたはずなのに生きているとはな。一体どういうタネを使ったんだお前？」

「只の一般人だと思ったのですが、高度な治療魔術の使い手にして、しかもマスターでしたか。迂闊でした。しかし今度こそ確実に息の根を止めて見せます」

肩に担いでいた紅い槍をクルクルと回した後、矛先をこちらに向ける槍兵。傍らで魔術師もファイティングポーズをとる。

「シロウは下がってジツとしていてください。私が相手をします」

自分を護るようにアル姉は前に出る。そして本気の時の服、蒼いドレスの上から白銀の甲冑を纏っていた。そして手には“何か”を握っている。

「ほう。私達2人相手を同時に相手取るつもりですか」
「それくらい出来なくて何が“使い魔”^{サイヴァント}か。問題ない」
「いいぜ、お前クラスは何だ？ セイバーとはさっき殺りあったし、アサシンのような後ろめたい存在ではなさそうだ。ライダーかアークチャ　ってどこか？」
「貴様にそれに応える必要はない」

そう言つてアル姉は“見えない何か”、おそらく剣を槍兵に向かつて真上から叩きつける。

あんなに怒っているアル姉は初めて見た。

今までに見たことのないほどの圧倒的な技の嵐を槍兵に向ける。対する槍兵も神速の突きによる弾幕を繰り出す。

再び人を超えた身の戦いが衛宮庭で繰り広げられた。

一旦距離を取った2人が剣戟と突きの代わりに言葉を交わす。

「どうしたランサー。止まっていたのは槍兵の名が泣こう。そちらが来ないなら、私が行くが」

「は、わざわざ死に来るか。それは構わんが、その前に一つ訊か

せる。貴様の宝具、それは剣か？」

「さあどうか。戦斧かも知れぬし、槍剣かも知れぬ。いや、もしや弓という事もあるかも知れんぞ、ランサー？」

「はっ、ぬかせ嬢ちゃん。強がりは大概にしな。確かに見えない得物つてのはやりにくいが、さっきのセイバーの方が一撃、一撃は重かったぜ」

「何をぬかす貴様、我が宝具を受けてみるか!？」

「ああ。こちらこそ我が槍の威力、見せつけてやろう
　　と思
　　つたが、その必要はないらしい」

大きく一步後ろに跳躍した槍兵は告げる。

「お前さん、2人を引き受けると言った割にはマスターの警護がお留守じゃねえか。悪いがウチのマスターの勝ちだ」

少女の顔が蒼白になり、ランサーの背後に位置する土蔵を見る。木刀を振るいつつも、門のところに追いつめられていた彼は、胸元を殴り飛ばされ土蔵の門ごと中に突き飛ばされていた。向かおうとする彼女の前に、無慈悲にも男が立ち塞がる。

「シロウ逃げて!!!」

どうやらアバラを2、3本持って行かれたらしい。土蔵の中に突き飛ばされ、背中を自転車にぶつけた。そのせいで左足首さえ挫いたらしい。最悪だ。門のところに魔術師が立ち塞がる。もう退路は

ない。かと言って、先ほどの木刀は彼女の背後。いくら日ごろ剣術を鍛えていたところで肝心の武器は手元がない。

完全に詰んだ。死という言葉が頭によぎる。

いやだ。まだ死にたくない。

俺は絶対に生きなくちゃいけないのに。

10年前の地獄の光景が脳裏に蘇る。

黒い太陽、燃え盛る焰、誰かの亡骸、最期の嘆き、そして俺を助けてくれた2人の笑顔。

絶対俺は生き延びなくちゃいけないのに。なのに、俺は無力だ。

外でアル姉が呼ぶ声がした。こうやって俺は護られるばかりのま
ま終わってしまうのか？

2人みたいになれず、俺は誰も救うことができないまま終わって
しまうのか？

そんなのは絶対に嫌だ。せめてアル姉は俺の手で護りたい。

でも俺には力がない。俺に力があれば、みんなを救ってやれるの
に。

しかし無慈悲にも魔術師は止めを刺すべく、近づいてくる。

「もういいでしょう。せめて最期は苦しませぬよう、ひと思いに殺し
てあげます」

目の前の魔術師が渾身の魔力を込めて拳を振り被った。最期の瞬
間に、普段全く信じてもない神へと祈る。

俺に力があれば！！！！

最期にそう願った。

その瞬間、土蔵を中心にして光の奔流が走る。新しく生まれ出ようとする存在の圧倒的な威圧感に、魔術師は後方に大きく飛び退き、場にエーテルの嵐が吹き荒れた。

光が収束して、光と呼べるものは月の光だけになった。そして月光に照らされて立っていたのは、1人の美女。腰まで届くほど長く伸ばした紫の髪に、眼帯を付けた長身の女性。だがその存在は明らかに人のものではなく、庭で戦っている2人と同質のものと感じ取れた。

彼女は口を開く。

「　　問いましょう。貴方が、私のマスターで間違いありませんね？」

マスターという言葉は敵の魔術師も使っていたが、おそらく使い魔の主という意味だろう。すると、左手の甲に焰で焼かれたような鋭い痛みが走った。もしかしてこれが契約の証なのだろうか。

「マスター？　お前も“使い魔”なのか？」

「ええ。サーヴァント・ライダー、召喚に従い参上しました。マスター、ご指示を」

「ライダー、そう呼べばいいのか？」

「はい。私は騎兵の枠を与えられたサーヴァント。ライダーとお呼び下さい、マスター」

サーヴァントという意味も、騎兵の意味も理解できなかったが、彼女が自分の使い魔になったことだけは理解できた。上半身を起こして、右手を差し出す。

「ライダー。俺に力を貸してくれ。俺には、助けてい人がいる」

彼女は跪いて差し出された手を取り、誓いを口にした。

「了解しました。これより我が剣は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にあります。ここに、契約は完了しました」

第2話 俺に力を貸してくれ（後書き）

士郎はライダー です。そしてこの士郎は切継だけでなくアルトリアにも影響を受けています。なぜアルトリアがいるのかはおおいおい書きます。オルタじゃなくてご存知ハラペコ王の方です。

バゼットさんはじめ、マスターやサーヴァントの組み合わせが変わっています。良かったら感想頂けると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4739z/>

王の酒と自転車 2号

2011年12月19日02時49分発行